

令和2年度 新時代の教育のための国際協働プログラム（教員交流）
ICTを活用したインクルーシブ教育実現に向けた提言



東京学芸大学

1 . 調査・研究概要

調査・研究名称

「諸外国の支援実践から追求するインクルーシブ教育」

事業期間

令和2年8月11日～令和3年3月31日まで

教員交流参加者の情報（所属機関の種別・人数など）

小学校教員5名、大学教員0名、 計5名

教員交流対象国・機関名及び機関毎の交流期間及び日数

デンマーク・コペンハーゲン

Hendriskholm skole (令和2年10月13日～令和3年3月22日5名)

Tinderhøj skole (令和2年10月13日～令和3年3月22日5名)

Rødovre skole (令和2年10月13日～令和3年3月22日5名)

連携機関名

日本マイクロソフト株式会社、Microsoft Denmark ApS

2. 教員交流プログラムの概要

交流国選定の理由

デンマークは障害者施策におけるインクルージョン発祥の国であり、教育現場では、特別支援学校全校にインタラクティブフロアプロジェクションやタブレットPCを中心としたICTを活用した支援が充実している。しかし通常学級においては、日本と同様、周囲の偏見など社会的な課題を抱えている部分もある。本プログラムでは、両国の文化や教育の違いを超えて共有できる教材はどのようなものであるかを探ると共に、日本におけるインクルーシブ教育に取り入れるべき教材コンテンツ、ICT活用の在り方を探ることを目的とする。

交流スケジュール

10月2日(金)	交流担当教員への研修
10月9日(金)	(オンライン会議) Microsoft Denmark Aps担当者、交流校教員を交えてFlipgrid(https:// info.flipgrid.com)のデザイン等交流の実際について
10月13日(火)	Hendriskholm skoleとの交流開始
10月30日(金)	交流担当教員への研修
11月6日(金)	「ICT×インクルーシブ教育セミナー」に合わせて開催。取り組みの中間評価。
11月15日(日)	Tinderhøj skole、Rødovre skoleとの交流開始
11月17日(火)	Hendriskholm skoleとの“Covid-19”Project開始
12月7日(月)	Tinderhøj skole、Rødovre skoleとの“Covid-19”Project開始
2月8日(月)	交流担当教員への研修



図1 Flipgridで、デンマークの学校との交流開始！

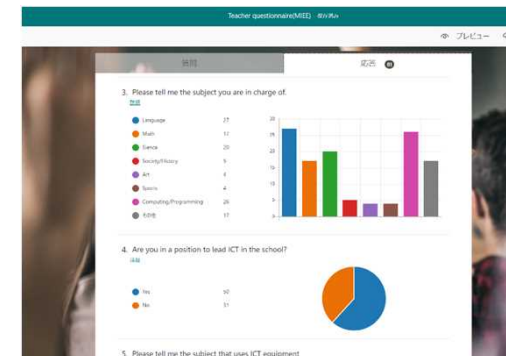


図2 コロナ禍で感染状況が悪化している時期は、オンラインフォームによる情報共有を行った。

2. 教員交流プログラムの概要

事業テーマに関する現状の問題点

問題点

ICTを活用した個別最適化された子供の学びの必要性は認識しているが、授業変革への見通しがもてない

学校におけるICT環境については、GIGAスクール構想により、飛躍的に高まることが予定されている。しかしICTを子供の学びにどのように生かすのか、個別最適化された学びという視点からみると、これまでの授業をデジタル化するだけでは不十分であり、教員の意識の変革や実際の授業デザインの見直しが求められている。

特にICTを活用したインクルーシブ教育については、必要性は認識しているものの、実際に自分の授業を変革していこうという動きが鈍い。こうした現状を変えるには、諸外国の先進的な事例を視察すると共に、そうした学校と（教員のレベルでも児童のレベルでも）交流を深めることで意識を変えていくことがもっとも近道であると考えた。

それにより、児童がICTを手にすることで学びそのものを大きく変え、教師はそれをサポートしながら学びに困難を抱えた児童への支援を行い、様々な凸凹をもった児童と一緒に学ぶことで、公平で誰にも成長の可能性が保障される教育環境を実現すること、そしてそれを社会に広く訴えるために、本事業を立案した。

問題を解決するための課題設定

課題 ICT活用を柔軟に運用していける学校の組織づくり

課題 インクルーシブ教育へのICTの活用

課題 オンラインとのハイブリッドによる教員研修と相談体制

【小学校教員によるアンケート調査より】

課題 ICT環境として、タブレットの配置や活用に制限がある。

課題 学校組織がICT活用にネガティブな反応があると、活用が組織化されない。

課題 ICT活用について、相談できる体制づくりがないと活用が促進されない

表2：ICT活用を阻害する要素

設備が不十分	16
予算不足	12
知識不足	8
リソースの不足	7
セキュリティ面の不安	6
ICTにネガティブ志向	5
ITリテラシーの不足	4
格差がある	3
その他	13
特になし	32

図3 ICT阻害要因

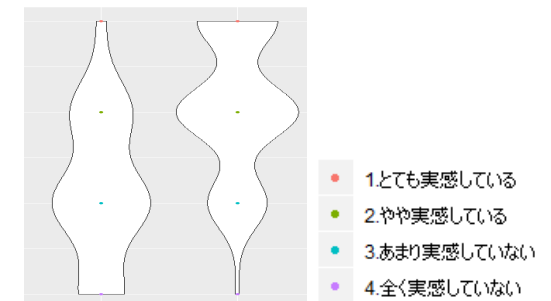


図4 支援ツールの効果と相談しやすさの関係

2. 教員交流プログラムの概要

提言作成の上で参考とした国際比較研究を通じた学び

職場のICT環境

日本では職場のICT環境について「充実している」との回答は70%、六大州全体では86%と差は見られなかった。日本では環境が充実している要素として、予算や職員室のWi-Fi環境が整っていることが挙げられた。インターネット環境の設備が整っていない、セキュリティーの心配など、整備の遅れが影響していることが伺える。

諸外国では、インドにおいて職場のICT環境に満足度が高く、ヨーロッパ、アジアや中東の一部で「全く充実していない」という回答があり、地域による差が伺える。

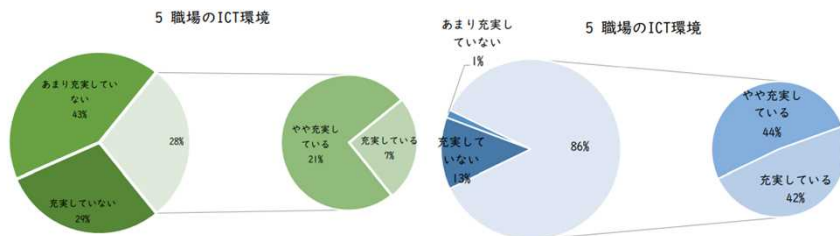


図5 職場のICT環境
Wi-Fi環境が整っていることが望まれているが、地域差がある。

授業で使用しているICT

使用している機器やアプリケーションに違いがあり、日本ではDVDや書画カメラなど、インターネット環境が整っていなくても使用できる項目が挙げられる。

一方、諸外国ではオンラインで使用するアプリケーションなどが多く挙げられ、環境面の影響が使用するものにも影響していることが伺える。

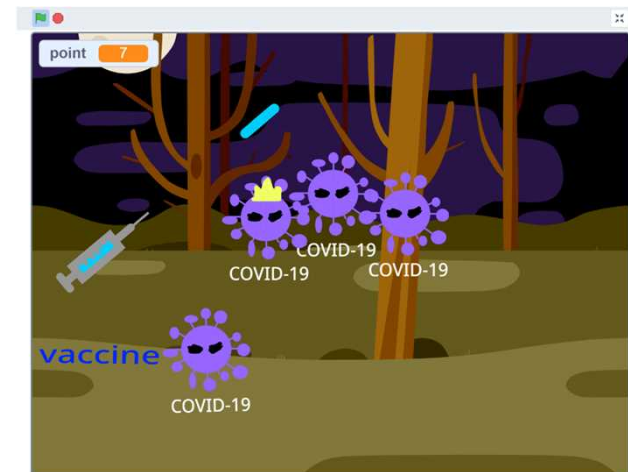


図6 授業で活用しているICT
日本ではオフラインのICT機器が主流。Wi-Fi環境が影響していると思われる。交流がきっかけで日本の児童が作成したプログラミングゲーム。

2. 教員交流プログラムの概要

提言作成の上で参考とした国際比較研究を通じた学び

ICTスキルの習得方法

ICTスキルの習得方法に差は見られなかったが、諸外国では日本での回答に挙げられなかった「オンライン」のセミナーやSNSなどが学びの場となっている。



図7 オンラインセミナーやオンデマンドの活用。参加するだけでなく、セミナーなどを企画、開催する経験がICTスキルの習得の機会となる。

ICT活用に対する周囲の理解

職場での「ICT活用に対する周囲の理解」において、日本では「理解していない」の回答が10%、諸外国で「理解していない」8%と差は見られなかった。また日本において「理解している」と回答した中に、「相談先がある」とこととの関連が見られた。ICT活用の阻害要因として、予算やICT専門の職員、支援員の配置がないなどが挙げられた。ICT活用を促進するには設備や人員といった環境整備、研修の機会や実行計画が必要とされる。

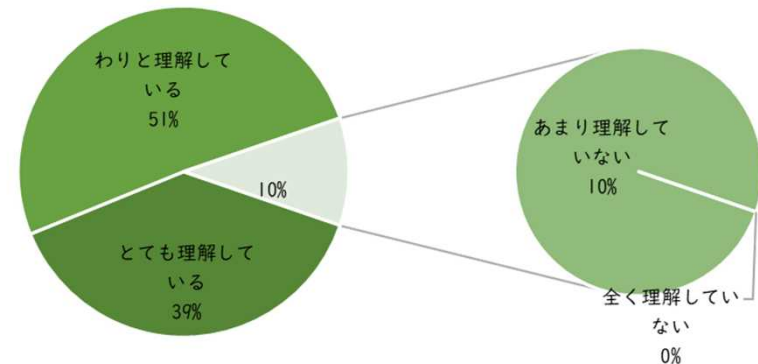


図8 ICTに対する周囲の理解を促進する要因として、「相談できる」人的環境が挙げられた。ICTをリードする教員やICT支援員の活躍が今後期待される。

3 . 提言「ICTを巡る環境の整備とインクルーシブ教育実現へのマインド」

課題解決に向けた構想・アイデア（ICT活用の側面）

一人一台タブレット環境を活かす教員側環境の整備
ICT活用の情報公開とトラブル（炎上など）の共有
ICT支援員の常勤化と相談体制の構築

一人一台タブレット環境を活かす教員側環境の整備

GIGAスクール構想によって一人一台タブレット環境が実現する。これにより児童の学習環境は飛躍的に改善されるが、教員側の環境については課題が多い。児童と同程度以上の端末を持つこと、新しい環境での様々な試行をする時間的な余裕等が必要である。逆にそれらを確保すればICT活用は大きく進む。

「発表する機会」＝「認められる機会」の創出

現代の教育現場は様々な課題に追われており、教員はそれをこなすのに精いっぱい新しいことに取り組もうという意欲を持ちづらい実態がある。それに対して、指導主事や管理職が指導をするよりも、新しいことに取り組んだことを認めるような機会の創出の方が効果は高いだろう。何らかの「発表する機会」、即ち「認められる機会」を設けることは、新しいことに取り組もうという教員を支えることになる。本事業で言えば、定期的なオンラインセミナーの

開催と、そこに教員を代わる代わる登壇させることが、教員の意欲を大きく高めることになった。

効果的な支援員の配置

支援員を配置し、それが効果的に機能するような工夫をすることが重要である。特にICTに対して苦手意識を持っている教員にとっては、何かあった時にすぐ聞ける体制、ICT活用の準備を手伝ってくれる人員が配置されている体制は非常に心強い。本事業では、Flipgridという活用経験のないアプリをメインで使ったので、それについてのサポートを担当する支援員を配置したが、これは非常に有効に機能した。

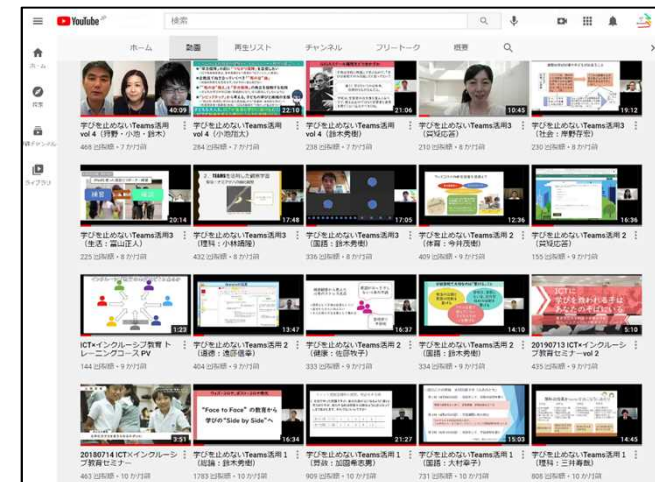


図9 実施したオンラインセミナーをYouTubeで発信することも教員の意欲や自己肯定感を高める。

3 . 提言「ICTを巡る環境の整備とインクルーシブ教育実現へのマインド」

課題解決に向けた構想・アイデア（インクルーシブ教育の側面）

児童の心に寄り添う指導

児童を信頼する

児童の心に寄り添う指導

休校や都市のロックダウンといった状況について差はあるが、「コロナウィルスの影響で通常の学校生活を送ることができない」ということに関しては、日本もデンマークも変わらない。

とは言え、デンマークの方が状況はかなり深刻で、クリスマス前には再び学校への登校ができなくなってしまっていた。Flipgridで送られてくるメッセージも、この時期は暗いものが多かった。

しかし、本事業を通じて印象的だったのは、こうした困難な状況も変わらないデンマークの教員の前向きさと、それに基づく細やかな児童への配慮であった。ICT環境に関しても日本同様、家庭によってはなかなか協力が得られない場合もあるようだが「できることをやっいていこう」というバイタリティには学ぶことが多かった。日本の教員の方が「運動会ができない」「宿泊行事ができない」といったことでネガティブになりがちなくらいで、この点に関してはマインドを変えていく必要があると考えられる。

児童を信頼する

学習に様々な困難を抱えている児童がいることは両国共変わらないが、デンマークの方が児童に「任せている」場面が多かったことは参考にすべき事項であった。

「支援」というと教員の側が考えに考えたものを「与える」というようになりがち側面があるが、デンマークでは、例えば「誰と学習を進めるか」といったことの決定を児童に任せる場面などもあった。（ある子は一人で、ある子はグループで進める、といったことになっていた。）インクルーシブ教育は、大人が「インクルーシブになるように」と手を回して実現するものではなく、児童が自らインクルーシブな環境を作れるような雰囲気を実現することに鍵があるということは、今後活かしていきたい学びであった。

